

世論調査からみた北海道の選挙

中島 章夫

開票速報が始まった途端、今回も開票率ゼロパーセントで当確を出す、いわゆる「ゼロ打ち」が相次いだ。北海道知事選挙もその一つだったが、出口調査の内容を聞いていて、どうも「早すぎないか」と気になったのは、その出口調査の構造は、筆者が「接戦の構造」と描いていたほぼイメージ通りの内容だったからだ。

民主党の体力は「二〇〇三年時水準」

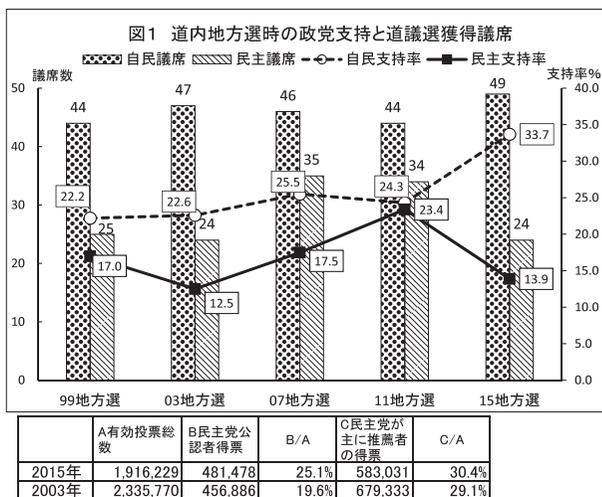
第一八回統一地方選挙は、全般的には「自民党は堅調、共産党が善戦」という結果になった。しかし議席減となった民主党については「底打ちか底なしか」といった議論がマスコミの注目を集めた。四一道府県議会議員選挙の結果が全国で二六四議席にとどまり、前回の三六四議席から大幅に落ち込んだためだ。この背景には「自主再建が可能か、それとも野党再編・新党結成に行くべきか」といった、これからの政局を見定めようとする底意が内在化されている。

しかし民主党は、つい二年半ほど前に政権失墜を経験し、いわばまだ再建途上の段階にあり、政権掌握時の前回二〇一一年地方選挙時の戦績と比較するにはそもそもが無理がある。さらに前々回の、政権獲得をめざし、無党派からの応援も得て勢いの見られた二〇〇七年地方選挙の戦績と比較でき

るだけの実態にもないことは明らかだ。

今回の選挙情勢と戦績を予測（シミュレート）するベースとしては、民主党の体力はおおよそ二〇〇三年地方選挙と同水準にあると判断し、北海道の知事選挙を含めたSM（シミュレーション）を立ててみることにした。これは両時期の地方選挙直前の民主党支持率が近似していること（図1参照、道内は道新で13%程度を前後する水準、全国ではおおよそ8%〜9%前後の水準）、また二〇一四年一二月の衆院選を境に、民主党の支持率がわずかにステップアップする気配を示し始めたことなどから判断したものだ。二〇〇三年水準とは、一九九六年に結成された民主党が、九八年に新進党から分裂した一部保守勢力と合同し新民主党に衣替えた（後）、同年の一〇月に自由党を吸収合併して政権獲得に向けてランクアップし始める（前）の時期である。

今回の選挙結果は、図に示したように、道議選挙の党派別獲得議席（推薦を除く）では、民主党は二四議席で二〇〇三年時選挙と同数に終わった（共産党も四議席で同数、自民は四九議席）。また得票数でも、民主党公認候補の得票率は25・1%で、二〇〇三年時の19・5%とは、「まずまず」と言える程度の差に収まり、無所属推薦候補者を含めた比率では30・4%と29・1%と、ほぼピタ



リ一致する結果になった（これは偶然もあるだろうが）。全国でも二〇〇三年時の民主党の獲得議席数は二〇五議席であったから（今回は二六四議席）、それよりは「善戦している」とも言える結果なのだ。民主党の（今）の体力は、そういう見方をしておいた方が良いと思う。

「接戦構造」に近い佐藤候補の善戦健闘

北海道知事選挙は、道政史上初めての四選目をめざす高橋はるみ候補に対して、全野党の推薦・支持を得た新人候補・佐藤のりゆきがどれだけ肉薄できるかが焦点となった。

表1は、当調査会が二〇一四年一二月の衆議院選挙時に実施した世論調査のまとめである（五選

選挙を統合集計、一三三一標本)。この調査では、民主党と共産党とは独自候補の擁立を模索してい

表3 可能なSM ※事前推計

政党	高橋 %	佐藤 %
自民	85	15
民主	20	80
公明	85	15
共産	20	80
社民	20	80
大地	30	70
維新	30	70
支持なし	45	55
計	144万8千	145万2千

表4 出口調査 道新	高橋 %	佐藤 %
自民	84	16
民主	21	79
公明	84	16
共産	21	79
社民	18	82
大地	33	67
維新	35	65
支持なし	50	50
計	149万7千	114万7千

表2 地方選時調査 3月・1633サンプル

	高橋はるみ	佐藤のりゆき	まだ選べない	NA
全体 %	45	33	19	3
男性	44	37	17	2
女性	46	29	21	3
20代	48	24	20	8
30代	62	27	11	1
40代	46	25	27	3
50代	42	34	22	2
60代	42	34	22	2
70代以上	47	33	16	3
自民党	78	9	11	1
民主党	17	69	13	0
公明党	73	19	7	1
共産党	17	69	12	1
社民党	26	53	21	1
新党大地	13	87	13	1
維新の党	35	52	13	1
その他の党	29	38	33	2
支持政党なし	31	29	38	2

表1 衆院選時調査 12月・1331サンプル

	高橋はるみ	佐藤のりゆき	民主推薦候補	共産候補	推挙候補	まだ決めてないetc
全体 %	43	17	7	3	27	
男性	44	18	9	3	25	
女性	43	16	6	3	28	
20代	33	17	8	1	42	
30代	46	19	1	1	35	
40代	35	19	10	1	35	
50代	49	16	5	5	20	
60代	43	18	9	3	26	
70代以上	44	16	6	4	27	
自民党	70	11	1	0	17	
民主党	22	25	26	1	25	
公明党	70	15	3	1	12	
共産党	20	20	3	35	22	
社民党	14	14	21	7	36	
新党大地	30	40	10	1	20	
維新の党	29	50	4	1	18	
その他の党	27	21	3	1	44	
支持政党なし	34	14	2	1	47	

た段階で、立候補の意思を明示していた高橋vs佐藤の力差は四三対一七と大差で「勝負にならない」状態と見られた。男女比、年齢比を見てもこの差は変わらず、政党でも民主党や共産党支持者の相当数（二割ほど）が既に高橋支持に回っており、無党派層でもかなりの差を付けられている。氏名未定の「民主党や共産党推薦の候補」に対する期待もほとんど見られない。高橋四選の既成事実化が進み、これを翻すことは大きな困難を予想させるものだった。

民主党は、脱原発市民団体らの「候補一本化」要請行動や、「二点共闘」路線の共産党「相乗り」（一九七九年以来三六年ぶりの野党共闘復帰）もあり、結果的には、非自公の全野党共闘を重視して佐藤のりゆき必勝態勢に切り替えた。

表2は、二〇一五年三月に当調査会が実施した世論調査結果（六道議選選挙区を統合集計、一六三三標本）だが、一騎打ち態勢が作られるに依りて勢力関係は大きく変化した。高橋vs佐藤は四五対三三と二ポイント差に縮まり、女性層、二〇代・四〇代の比較的若い層での高橋優位が目立つが、無党派層はほぼ五分の状態にあり、接戦勝負に持ち込むことが可能なレベルになっていた。同時期に報道されたマスメディアなどの世論調査も似たような傾向を示していた。

こうした調査傾向を踏まえて作成した「接戦勝負の構造」SMが表3になる。自民と公明の支持層の85%程度は高橋支持で固まることは必至で、佐藤も支持拡大運動の進捗で民主、社民だけでなく、共産支持層も八割程度の支持を得られそう。すこし夕方の緩い（無党派をベースとした）大地や維新も佐藤七対高橋三程度に収まり、無党派で

「やや優勢」という構造を作ることができれば、高橋四選を阻む戦いとなりうる可能性ができた。あった。

マスコミ調査を踏まえると、知事選投票率は4%〜5%程度上がると推測することができたし、佐藤候補の支持拡大運動が順調に進むと仮定して、高橋一四万対佐藤一四五万という、すこし希望的観測も入れたSMが可能になった。

だがどうも投票日一週間前あたりから、佐藤氏の支持の拡がりの伸び悩みが感じられはじめた。こうした情勢を踏まえて、投票日直前四月七日に作成した選挙構造SMは、投票率63・7%で高橋（最大一六二万、最少一三三万）、佐藤（最大一五一万、最少一二六万）というものだった（内容は北海道世論調査会のホームページに掲載）。

表4は、道新の出口調査と選挙結果である。予測（接戦勝負の構造）と違ったのは、第一に投票率が見込みほど上がらなかった（0・16%アップのみ）こと。第二に、このことにより無党派層の投票参加が予測より少なく、しかも佐藤優位の配分を作れなかったこと。第三に、各政党支持層における獲得構造では大きな違いを見せなかったが、自民党自体の支持（基礎数）が予測より大き過ぎたこと、等があげられる。

結果から言えば、得票数三五万、得票率13・2%の差は、接戦とまでは言えないが善戦健闘した選挙であった。前提条件のいくつかが変わってれば、結果も変わっていた。全国的には与野党相乗りの首長選挙の中にあつて、北海道知事選挙は、比較して「面白い・活気ある選挙戦」として出来上がった。四年後に楽しみをつなぐことができる。

へなかじま あきお・北海道世論調査会